





# no one left behind 誰一人取り残さない社会

佐久間 啓

社会医療法人あさかホスピタル 理事長・院長

介護老人保健施設 啓寿園の園庭。  
数種類の桜や色鮮やかな水仙やツツジなど  
四季折々に心和む表情を見ることができます。

今、世界はCOVID-19の感染拡大の中で、大きく変化しています。これを書いている6月中旬の段階でも、7月開催予定の東京2020オリンピック・パラリンピック(以下オリンピック)を前にして新型コロナワクチン接種も進まず、感染コントロールも難しい状態で、医療の逼迫も続いている。国民の多くがCOVID-19の感染の恐怖と戦い、緊急事態が宣言される中で今もなお、オリンピックを開催する意義は何なのか、賛否の分かれるところです。この新型コロナウイルス感染という地球規模の災害によって、様々な日本の課題が見えてきました。国がシステムとしてのIT化、デジタル化の遅れが明らかになり、学校で全くICTが活用されておらず、オンライン授業など殆ど不可能です。

感染制御やオリンピック開催においても日本の行政の機能不全が明らかになりました。危険と判ついても変異株がどんどん持ち込まれて管理不能な中で、ワクチン接種も遅々として進まず、感染対策の意思決定が何処でなされているのか、オリンピックは誰が最終判断をしているのかさえ、見えてきません。国のリーダーシップが何処にあるのかが見えず、多くの国民は不安を通り越して呆れています。海外では当たり前のワクチン・スポーツとも日本では遠い夢のようです。有事の際に柔軟に対応することができない行政の硬直化が明らかになりました。日本が医療科学技術において先進国であるという幻想を抱いていた国民も、現実に気づかされたと思います。

コロナ禍の中でも、SDGs(Sustainable Development Goals)、Carbon Zero(二酸化炭素排出ゼロ)と世界は動いています。地球温暖化やそれに伴う異常気象、地球環境の破壊が止まらないこの現状を受け止め、次の世代に向けてこの地球を守つて行こうという動きが大きく加速しています。地球環境に配慮した企業への投資が増え、守らない企業への課税を増やすなど、社会の仕組みも大きく変化しています。エネルギー政策にも国によって大きく開きがありますが、日本のこれまでの対応や技術開発、国民の意識の全てにおいて、ヨーロッパの先進的な国々と大きな隔たりができるています。エネルギー政策にも国によって大きく開きがありますが、日本のこれまでの対応や技術開発、国民の意識の全てにおいて、ヨーロッパの先進的な国々と大きな隔たりができるています。エネルギー政策にも国によって大きく開きがありますが、日本のこれまでの対応や技術開発、国民の意識の全てにおいて、ヨーロッパの先進的な国々と大きな隔たりができるいません。中国のウイグル族、ミャンマーのロヒンギヤ族など、政治的な背景も複雑なことは素晴らしいことだと思います。

ですが、企業が人権侵害を黙認して利益を挙げることが強く非難されるようになりました。世界中の情報が瞬く間に広がる現代では、正しい情報に基づいてであれば、このような問題が広く世界で共有され、協力して対処しようという動きに繋がることは素晴らしいことだと思います。

世界中のどの社会においても程度の差こそあれ共通の課題があります。日本では世界に遅れること40年、1996年までハンセン病患者への隔離政策がとられ、その後違憲であるという判決が出されてから20年以上経過して、ようやく今年の5月に国家賠償の問題が全面解決しました。旧優生保護法で障害を持つ方々への強制的な不妊手術についても、暗く長い歴史があります。精神科医となって間も無く1983年に宇都宮病院事件があり、WHOが視察し、精神保健法ができて精神疾患に罹患した方々の人権についての法が制定されました。しかし、日本で精神障害者は、障害者基本法で障害者として認められたのは1993年になつてからでした。

環境問題、障害者の人権侵害、子どもや高齢者的人権や虐待、LGBTなどの性別違和など、どの課題もとつても日本の政策も、国民の意識も先進国には大きく遅れをとつてきました。私は常々、障害者的人権や福祉の意識は国の文化度を表すと考えてきました。病院長として30年弱が経過しますが、この20年程は、着実に社会の変化を感じています。しかしながら、例えばメンタルヘルスの問題によって入院を含め学校にいける子子ども達にどうやって教育を継続するか、残念ながらこれまでの枠組みを前提にしての限界を説かれるばかりで、抜本的な改革は期待できません。また、子どもの虐待への対応においても、行政は杓子定規な枠組みを述べ、法律以上に慎重な対応で、子ども自身をどれだけ早く救おうかという気概は全く感じられません。

あさかホスピタルグループとは、誰もが幸せに健康に生きることができる社会、即ち「誰一人取り残さない社会」を目指してきましたが、コロナ禍の中で、SDGsを含む、より広い視野で地域社会のあるべき姿を考える時なのだと実感します。そして特に子ども達の幸せで健やかな成長を見守ることのできる社会を目指したいと改めて考えます。







